

誰もが人間として生きていくうえで 侵すことのできない当然の権利 これが『人権』です

子どもたちの人権作文

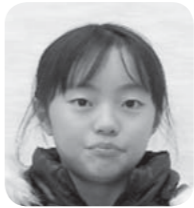
12月の人権旬間にあわせて、子どもたちが書いた人権作文を先月に引き続きご紹介いたします。今月は3名の作品を紹介いたします。

(今月は矢部小 井上葉那さん 清和中 橋口紗也加さん 矢部高岡崎真実さんの作文を掲載します。)

「わたしが考える人権」

矢部小学校

6年 井上 葉那さん



私達は、人権について考えるため、人権センターへ行き、聞きとりをしました。ムラの人々は、差別を受けていて、生活がとても苦しかったと話されました。仕事ももらえず、同じ仕事をしていても、賃金も他の人より低かったそうです。また、ムラの子供もは学校に行けず、字が覚えられなかったそうです。学校に行っても、いじめられていたそうです。ムラの人は、とても苦しかったし、くやしかったらうと思いましたが、私は、そのムラに住んでいるというだけで、差別されるのはおかしいと思います。ムラの人は、くらしをよくするために、何度も、何度も、要求し続けました。

要求を聞いてもらうために、役場の前で、座わりこみをしたそうです。それが、ハリストであることを私は初めて知りました。ハリストは、命がけの戦いでした。そこまではないと、道を広くしてもらえないのはおかしいと思いました。道がせまいと消防車や救急車が通らない、それは命に関わる問題だからです。ムラの人が差別に対して「おかしい。」と立ち向かったように、私自身も、おかしいことはおかしいとはっきり言える人になりたいと思いました。 矢部小では、毎月二十三日に、リボン登校をしています。自分のことやクラスで起きた問題、みんなに伝えてほしいことなどを各学級へ行って伝えていきます。私は、必ずリボン登校の呼びかけをします。それは、いじめや差別がなく、みんなが笑顔で仲良く暮らせるような、平和な矢部小にしたいからです。 私は、五年生のとき、おつかいに行っ

た帰り道に、下級生三人と会いました。すれちがうとき、一年生の子が私のことを、「あの子、あんなに小さいのに五年生なんだって、おかしいね。」と笑いました。そして、二年生と四年生の子も笑いました。私は、とても悔しかったのです。私の心は、「小さくて何が悪いの、何がおかしいの。」という気持ちでいっぱいになり、泣きそうでした。その時は何も言い返せませんでした。六年生になって、そのことを勇気を出してみんなの前で言いました。それを聞いた友達が、たくさん意見を返してくれました。一番、心に残ったのは、ある男の子が、「小さい葉那ちゃん、何が悪いの。」と言ったことです。私も、そう思ったし、うれしく思いました。また同じことがあったら、「小さくて何が悪いの。」と言いつつ、私を、みんなの前で言いました。 三年生の頃、友達の家遊びに行ったら、「なんでくると。」「来んでくれん。」と言われたそうです。私の友達は、何も言えずに帰りました。私はそのことを聞いて、とても悲しくなりました。そんな言葉は、絶対いけないし、ひどい言葉だと思えます。それを聞いた男の子が、「ぼくは、同じようなことをしました。でも、その時、モヤモヤした気持ちで、スッキリしませんでした。」と言いました。私は自分のしたことを、言えるんです。私には自分のしたことを、言えるんです。私には自分のしたことを、言えるんです。

「一歩踏み出す」

清和中学校

2年 橋口 紗也加さん



「明日は五・二三集会か。」「一気にゆうづつになった。私がお初めて五・二三集会上に参加したのは中学一年生の時だ。正直、「人権」について興味を持たず、親もそんな話をしたことなかった。親も「五・二三集会なんて行かなくてよかよ。」と言っていた。

小学生の頃も、集会に行くチャンスは十分あった。でも、めんどうくさいと思って、行こうとは思わなかった。中学生になって、友だちや先輩が行くならという思いで、しぶしぶ行っただ。 そんな中で、集会に参加して気になったのが部落差別のことだった。「部落って何？」という疑問が湧いてきた。 学校で、人権講演会があった。被差別部落出身教師の森山さんが話をしてくれた。 森山さんは、子どものころ、自分が部落出身であることを知らされていなかった。そうした中で、友人の家遊びにいったとき、その友人の祖父から「あんたどこ出身ね？」とたずねられた。森山さんは、「〇〇出身です」と返すと、「あんたは帰れ！」と言われた。私には、この話を聞いて、「何で？」と疑問に思ったが、この話から出身地で差別がある。「ああ、これが部落差別なんだ」ということを知った。 また、森山さんがおとなになって結婚するとき、義理のお父さんに部落出身のことを伝えると、「おれは部落出身の森山なんか知らん。娘が連れてきた森山なら知つとる。」と言われたという

話を聞いた。 私は、その話を聞いて、すごく「カッコいい」と思いました。部落出身を「カッコいい」と思っている人がいる中で、まったく「カッコいい」と思っていない人がいるという話を、すごくすく「カッコいい」と思った。 この講演会には、私の母も聴きにきていた。家で「ねー、部落って山都町にもあるの？」と私がたずねると、母は「んー、どうだろうね。」と答えた。 また、「なんで差別ってあるんだろうね。」と私がたずねると、「分からなけれど、誰かを責めることで、自分を守ってるんじゃないのかな。」と母は返してくれた。そして、「差別する人ってかわいそうだね。」と私が言うと、「何で？」と母が聞き返した。私は「だって誰かを責めることでしか自分を守れないなんてかわいそうじゃない。」と答えた。すると母は「うーん。難しいね。」と言った。 母とこんな話をしたのは、初めてで、なんか変な感じがした。 そして、私が「お母さんはさあ、紗也加が被差別部落の人を連れてきたら、森山さんのお父さんみたいに言えるかな？」とたずねると、母は「言えるといいね。」と言った。私は本当に言えるといいなと思った。それは、いまだに差別があるため、部落出身であることを気にしてしまう人がいる中、森山さんのお父さんのような人、自分の母になってほしいと思ったからだ。 部落差別のことを知れたのも、母と話をしてくれた人たちが、私たちに正しいことを伝えてくれたからだと思う。 森山さんの話を聞いて、正しい知識が増えたと、身近にある差別について知ることができた。 そして、自分のことを重ねて考えられたことが多くなった。それはかつてクラスでいじめが起きたときのことだ。 私はいじめを注意できたのかな？一緒になっただけでいじめたのではないかと振り返った。そして結局は、「自分はちがう」と言いながら、自分も誰かを責めることで、自分を守っているだけじゃなかったのかと思った。また、きれいごとを並べているだけじゃダメだと思った。今、私は、自分もきちんと考え、行動することで、身近なところから差別はなくなるんじゃないかと思うようになった。 「差別はなくなるよ。」という人がいる。それは、その人が何か行動してからの言葉なのだろうか？もし、努力していない人にそんなことを言われたら、努力を踏みつぶしていることと一緒にじゃないかと、今、私は考えるようになった。人権に興味や関心があった自分がこんなふうに見えるから、二・三集会で話をしてくれた人たちなど、差別をなくすために努力しているたくさんの人たちのおかげだと思える。 今の私は、行動して、少しでも差別をなくしていこうと思っている。そのため、来年も五・二三集会に参加しようと思う。 中学二年の今、私は一歩踏み出そう

話も聞いた。 私は、その話を聞いて、すごく「カッコいい」と思いました。部落出身を「カッコいい」と思っている人がいる中で、まったく「カッコいい」と思っていない人がいるという話を、すごくすく「カッコいい」と思った。 この講演会には、私の母も聴きにきていた。家で「ねー、部落って山都町にもあるの？」と私がたずねると、母は「んー、どうだろうね。」と答えた。 また、「なんで差別ってあるんだろうね。」と私がたずねると、「分からなけれど、誰かを責めることで、自分を守ってるんじゃないのかな。」と母は返してくれた。そして、「差別する人ってかわいそうだね。」と私が言うと、「何で？」と母が聞き返した。私は「だって誰かを責めることでしか自分を守れないなんてかわいそうじゃない。」と答えた。すると母は「うーん。難しいね。」と言った。 母とこんな話をしたのは、初めてで、なんか変な感じがした。 そして、私が「お母さんはさあ、紗也加が被差別部落の人を連れてきたら、森山さんのお父さんみたいに言えるかな？」とたずねると、母は「言えるといいね。」と言った。私は本当に言えるといいなと思った。それは、いまだに差別があるため、部落出身であることを気にしてしまう人がいる中、森山さんのお父さんのような人、自分の母になってほしいと思ったからだ。 部落差別のことを知れたのも、母と話をしてくれた人たちが、私たちに正しいことを伝えてくれたからだと思う。 森山さんの話を聞いて、正しい知識が増えたと、身近にある差別について知ることができた。 そして、自分のことを重ねて考えられたことが多くなった。それはかつてクラスでいじめが起きたときのことだ。 私はいじめを注意できたのかな？一緒になっただけでいじめたのではないかと振り返った。そして結局は、「自分はちがう」と言いながら、自分も誰かを責めることで、自分を守っているだけじゃなかったのかと思った。また、きれいごとを並べているだけじゃダメだと思った。今、私は、自分もきちんと考え、行動することで、身近なところから差別はなくなるんじゃないかと思うようになった。 「差別はなくなるよ。」という人がいる。それは、その人が何か行動してからの言葉なのだろうか？もし、努力していない人にそんなことを言われたら、努力を踏みつぶしていることと一緒にじゃないかと、今、私は考えるようになった。人権に興味や関心があった自分がこんなふうに見えるから、二・三集会で話をしてくれた人たちなど、差別をなくすために努力しているたくさんの人たちのおかげだと思える。 今の私は、行動して、少しでも差別をなくしていこうと思っている。そのため、来年も五・二三集会に参加しようと思う。 中学二年の今、私は一歩踏み出そう

「意識するとういこと」

矢部高等学校

2年 岡崎 真実さん



私とこの作文を趣味が違います。食べたきた朝食が違います。住んでいる場所が違います。しかし、世間では「同じ人間同士」です。もちろん、同じ所もあると思います。何も食べなかつたらお腹が空くし、ずっと起きていたら眠くな

と振り返った。そして結局は、「自分はちがう」と言いながら、自分も誰かを責めることで、自分を守っているだけじゃなかったのかと思った。また、きれいごとを並べているだけじゃダメだと思った。今、私は、自分もきちんと考え、行動することで、身近なところから差別はなくなるんじゃないかと思うようになった。 「差別はなくなるよ。」という人がいる。それは、その人が何か行動してからの言葉なのだろうか？もし、努力していない人にそんなことを言われたら、努力を踏みつぶしていることと一緒にじゃないかと、今、私は考えるようになった。人権に興味や関心があった自分がこんなふうに見えるから、二・三集会で話をしてくれた人たちなど、差別をなくすために努力しているたくさんの人たちのおかげだと思える。 今の私は、行動して、少しでも差別をなくしていこうと思っている。そのため、来年も五・二三集会に参加しようと思う。 中学二年の今、私は一歩踏み出そう

てしまいません。陰口を言っている時はモヤモヤするけど、友達が笑うので安心してしまいます。でも本当に安心できるのは「好きなもの」の話を友達が笑って聞いてくれる時なのです。そう分かっていくのに、反応してくれるのが嬉しくてどんなに陰口が増えても大丈夫です。「これじゃ、大人になって誰からも信用されなくなってしまうかもしれない。幼少の頃、陰で友達の悪口を聞いたら反論できていた自分に戻りたい。」そう思うことが何回もありました。 高校二年生になって、人との関わり方を少しだけ変えました。愚痴や陰口は全部とは言えませんが、減らしてみようと思った。陰口を減らした効果で、人を助けることが自然にできるようになったのか、自分の仕事が忙しくても、人が好んで手をつけようとは思わない仕事も時間を見つけて引き受けることができるようになった。心懸けを少し変えれば、現状も変えられることが分かりました。もちろん自分の弱い部分も全て無くなった訳ではありません。自分を変えていくには時間がかかります。心懸けていることを忘れてしまいたい、愚痴や陰口を言ってしまうこともありません。 戦争の無い世界を望むなら、私たちが毎日にもきつかけが必要だと思えます。持つとしても、満ちた武器にしてぶつかけ合ったとしても、犠牲にしたもの大きさを比べると得られたものは小さいです。「敵だからどうなってもいい。」と思うのではなく「同じ人間同士、どうにかしたい。何かできないか。」と思えることが必要です。世界を変えようと思えば、今の私には分かります。争うべきではないのには分かります。安心して暮らせる世界には何が安全なのか、毎日の身近な生活で自分自身が考えて行動していき